

### 矢吹家十二支箱文書（やぶきけじゅうにしはこもんじょ）

矢吹家資料は、津山市南新座の矢吹家に伝来した、古文書・絵図・和書を中心とする資料群です。

その内容は多岐にわたりますが、中核を成す資料としては、矢吹家において十二支に仕分けされた木箱に整理されていた古文書群で、この十二支箱の古文書群（668件 6410点）は、ほぼ津山松平藩の郡代所文書で構成されています。

郡代所文書は、郡代所の様々な実務の中で、担当者や当事者によって作成された文書類であり、山論や村の生活の中で実際にやりとりされた生の資料であることから、その価値は高いものです。

近世津山藩の農政史研究や美作地域農村研究に欠かせない資料であり、岡山県指定重要文化財である津山藩松平家文書の中に、国元日記や町奉行日記などと共に残されている郡代日記と合わせて利用することにより、更なる研究の進展が期待される資料群です。（平成 27 年 4 月 23 日指定）



### 宇田川榕菴自筆資料（うだがわようあんじひつしりょう）

江戸時代中期以降、津山藩は江戸詰の藩医を中心に優れた蘭学（洋学）者を輩出しましたが、その先駆けが宇田川家です。津山藩に初めて蘭学をもたらした宇田川玄随（げんずい）その跡を継いだのが玄真（げんしん）そして玄真の養子が榕菴（1798～1846）です。

榕菴は、日本初の西洋植物学書『植学啓原（しょくがくけいげん）』や日本初の化学書『舎密開宗（せいみかいそう）』を刊行し、日本における近代科学の確立に大きな功績を残しました。

本資料（18件 82点）は、津山洋学資料館が寄贈や購入によって収集した宇田川榕菴の自筆及び旧蔵資料で、たとえば「植学啓原図」は『植学啓原』の植物図の色校正で、「舎密全書等」「糖酸に関する訳稿」などは化学研究の一端を伝えるものです。「宇氏秘笈（うしひきゅう）」「オランダカルタ」などはヨーロッパ文化への高い関心を示し、いずれも榕菴の幅広い好奇心を伝えるものであり、榕菴研究において貴重な資料群です。

（平成 27 年 4 月 23 日指定）



植学啓原図